

連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクト の名称	近年の自然災害を踏まえた防災， 減災教育と学校危機管理の構築		
研究 期 間	平成31年4月1日～令和4年3月31日	プロジェクト記号	X
チーム構成員の氏名・職名等・所属（配属）大学（◎：チームリーダー）			
◎藤岡達也・教授・滋賀大学	村田守・教授・鳴門教育大学（R3, 3月まで）		
吉水裕也・副学長・兵庫教育大学	加藤内蔵進・教授・岡山大学		
阪根健二・教授・鳴門教育大学	宮下敏恵・教授・上越教育大学		
阪上弘彬・助教・兵庫教育大学（R3, 9月まで）	山縣耕太郎・教授・上越教育大学（R3, 4月より）		
佐藤真太郎・博士院生・滋賀大学 ↑	堀道雄・博士院生・滋賀大学		
行壽浩司・博士院生・兵庫教育大学	曾川剛志・博士院生・兵庫教育大学		
川真田早苗・教授・北陸学院大学 ↑	渋谷友和・准教授・奈良学園大学 ↑		
	↑ プロジェクト中に教諭（博士）から異動		
プロジェクト全体の研究経過及び研究成果			
<p>・3年間における研究活動（研究会開催， 調査活動， 研究成果の公表等）の概況や個々の分担研究の特筆すべき事項等について， 簡潔に箇条書きでお書きください。</p> <p>1. 研究会開催 全 10 回開催， ただし， コロナ禍のため， 第 1 回（神戸）， 第 2 回（鳴門）第 3 回（岡山）， 第 4 回（神戸）， 第 10 回（上越）以外の 5 回はオンラインで開催。</p> <p>2. 調査活動 1 年目のプロジェクト開始時期は， 計画通り， （1）近年の自然災害被災地における教育委員会・学校教育現場での防災・減災教育， 復興教育取組の調査が実施可能であった。例えば， 東日本大震災被災地での， 岩手県， 宮城県， 福島県等の教育委員会・学校教育現場での実地調査等。また， 日本初の大雨特別警報が発表された滋賀県， 2018 年西日本豪雨（岡山県の気象災害分析， 広島県の土砂災害復興調査）の災害に繋がった自然現象の検証， それを踏まえた新たな学校防災， 危機管理の構築に向けての取組が始まった。 ところが， 1 年目の終盤からの新型コロナウイルス感染症のため， 新たな取組に対応せざるを得ない状況に陥った。しかし， 逆手にとって， 知事部局・教育委員会と連携したコロナ禍における避難所運営， 防災訓練等に取り組む以上に：学校危機管理全体の組織体制の研究にもつながった。また， 当初から， ESD/SDGs, STEM/STEAM の視点を持っていたが， 文字通り「誰一人取り残さない」， 「オンライン・オンデマンド」を含めた ICT 教育， ICT 教材開発を取り入れる必要があった。</p> <p>3. 研究成果の公表 ①教育大学協会研究集会での 1 部門独占 大学教員が全員所属する教育大学協会研究集会での「自然災害と学校防災・危機管理Ⅰ～Ⅲ」と同一タイトルでの連続発表を行うことができた。2019 年（岡山大学）5 本， 2020 年（愛媛大学）10 本， 2021 年（福岡教育大学）8 本， 2021 年では目標の 1 分科会（第 6 分科会 A）の発表を全て本研究プロジェクトで占めた。ねらいとしては， 従来の修士課程が廃止され， 教職大学院 1 本化となり， 教員養成系大学は， もはやかつてのような教育研究は厳しいとささやかれる中， さすが連合大学院は違々と， 国立大学法人を構成する多くの大学から， それなりの評価を受けたと言える。</p> <p>②学術図書の刊行 科研費の出版助成に近い形での書籍刊行物を 3 年連続公刊することができた。兵庫教育大学連合大学院・防災教育研究プロジェクトチーム著「近年の自然災害と学校防災Ⅰーこれからの時代に求められる防災・減災ー（全 214 頁）」（2020）， 「近年の自然災害と学校防災Ⅱー持続可能な社会をつくる</p>			

防災・減災，復興教育－（全 208 頁）」（2021），「近年の自然災害と学校防災Ⅲ－グローバルな「生きる力」を育成する防災，減災－（全 207 頁）」（2022），いずれも協同出版，これらは専門書に相当し，A 著書レベルに評価されることが多く，連合大学院博士課程の院生の業績ともなり，大学への異動にも繋がった。①と同様，本連合大学院の知名度の向上や大学院希望者増が期待できる。

③学会誌の掲載

本研究プロジェクトでは，A 論文相当 2 本が義務づけられているが，博士課程院生を抱えているため，必然的に院生の入学時（＝プロジェクト開始時）から期待はされていた。A 論文相当の掲載された学会誌は以下のとおりである。

1) リスクテイクな連続的意思決定を個別に行わせる地図活用型防災学習の開発－都市部沿岸人口密集地における図上避難訓練「DIG&クロスロード ディクロ」－，新地理 68-3，pp.1-26，2020，曾川剛志。

2) 近年の理科教育における自然災害の取扱いの現状と課題－平成に発生した自然災害と学習指導要領改訂等から捉えた理科教育への影響－，理科教育学研究，60-3，1-9，2020，佐藤真太郎，藤岡達也

3) 地震を取り扱った授業における防災プログラムの開発とその評価－長野市の中学生を対象として－，地学教育，72(3)，1-13，2020，榊原保志，藤岡達也 他

4) 環境教育の視点から防災，減災をどう捉えるか－環境教育学の構築に果たす災害研究の意義と課題－，環境教育，30(1)，56-61，2020，藤岡達也

5) 理科授業における自然災害発生時の行動選択能力の育成を目指した教材開発及び授業展開－単元「流れる水の働きと土地の変化」での「大雨による災害に対する危険予測や適切な避難行動」の取扱い－，理科教育学研究，61-2，287-297，2020，佐藤真太郎，藤岡達也

6) 現代的教育課題の取組を進めるための教員研修の構築に関する考察－東日本大震災以降の放射線教育実践に向けての試みから－，理科教育学研究，61-3，489-496，2021，堀道雄，藤岡達也

7) 小学校理科における河川環境を主題としたカリキュラム・マネジメントの開発－SDGs を踏まえ，滋賀県野洲川流域を例にした実践から－，理科教育学研究，66-2，475-483，2021，堀道雄・藤岡達也

8) 自然災害に関わるプログラミング教材の活用－防災教育と連動した STEM 教材の開発と実践による教育的効果の活用－，理科教育学研究，62-3 号，611-620，2022，佐藤真太郎，藤岡達也

（大学紀要等 B 論文相当，学会発表等 略）

Ⅱ. 個々の分担研究の特筆すべき事項等

著書

研究代表者（単著，編著）

1) 「絵でわかる世界の地形・岩石・地質」，講談社，2020 年 3 月，藤岡達也

2) 「今，先生ほど魅力的な仕事はない！」，協同出版，2020 年 1 月，藤岡達也編著

3) 「授業づくりのための中等理科教育法」，ミネルヴァ書房，2022 年 5 月，山下芳樹，藤岡達也編著

4) 「1 億人のための SDGs と環境問題」，講談社，2022 年 3 月，藤岡達也

5) 「SDGs と防災教育－持続可能な社会をつくるための自然理解」，大修館書店，2021 年，藤岡達也

6) 「小学校教員と教育学部生のための理科授業の理論と実践」，講談社，2021 年 3 月，藤岡達也編著

研究代表者（分担執筆）

2021～2023 年度版「必携教職六法」，協同出版，2021～2023 年 1 月，高見茂，若井彌一，藤岡達也他
理科総合大百科 2022，少年写真新聞社，2022 年 1 月，藤岡達也他

持続可能な社会と教育，教育出版，2019 年 7 月，藤岡達也他，日本環境教育学会等監著

（注）氏名欄は適宜増減してください。

* 字数の制限はありません。記述欄が不足する場合は，複数枚になっても構いませんので適宜行数を増やしてください。